

# 長野盆地の自然と土地利用

## その風土の歴史地理学的考察

Nature and Land Use in the Nagano Basin:  
Historical Geography of Climate (Klima)

市川健夫

はしがき

①扇状地地形の卓越

②千曲川沖積地の土地利用

③内陸性気候と土地利用

むすび

### 【論文要旨】

1) 長野盆地は弥生時代から農地開発が進められ、近世末までに平地林をほとんど見かけないほどになった。この盆地地形の多くは、山麓に堆積した扇状地によってしめられている。最大の扇状地は犀川扇状地（川中島平）であり、水利の便がよいので水田率が高い。鎌倉時代から米麦二毛作が営まれていたが、小麦の不整地播きと水稻の遅植えによって、高い農業生産力を維持してきた。

2) 善光寺の門前町である長野の旧市街地は、裾花川と浅川の複合扇状地の上に立地している。裾花川扇状地は三つの段丘面があるが、その段丘崖（幅地形）には湧水があり、弥生時代から集落が立地している。この複合扇状地の扇央から扇端にかけては、条里制遺構水田があり、古くから水田開発が進んでいた。

3) 盆地の北部には百々川・松川・夜間瀬川などの大きな扇状地が発達している。水利に恵まれないこともあって、古代には笠原牧・高井牧などの広い御牧が置かれた。この粗放的な土地利用は、当時ヤマト王権のフロンティア（辺境）であったことを示している。中世・近世を通じて農地開発が進み、幕末から桑園→養蚕が発展した。昭和恐慌・第二次大戦後を通じて、内陸性気候・扇状地地形に適した果樹農業を大きく発展させた。

4) 中央高地の諸盆地の中で、最も沖積地が発達しているのは長野盆地である。この盆地をうるおす千曲川は、1/900以下の緩流となる。河の沿岸には幅の広い自然堤防が発達し、山麓線や扇状地との間に氾濫原がある。この氾濫原には、条里制遺構水田がみられる。この生産力の高い稲作が、古墳文化などを発展させた。自然堤防上では近世綿花や菜種などの商品生産が発達し、幕末からは養蚕が盛んになった。河川敷や堤外地の耕地には、地割慣行地が発達している。